

明日の淡海

自然と人との共生をめざして

Vol. 7
2002.9.1 発行



琵琶湖ヨシ松明まつり

CONTENTS — Ohmi in the future

巻頭特集 「いのち」きらめく恵みの湖を、未来の子どもたちに伝えるために 3

東近江水環境自治協議会会長 丹波 道明・同会副会長 西川 嘉廣・ 淡海環境保全財団副理事長 山岡 完右

巻頭言 魚の目で、琵琶湖を早急に捉え直そう 滋賀県立琵琶湖博物館 館長 川那部 浩 哉 2

環境人リレーインタビュー 世界に目を向け、行動すべき時が来ている 10

「環境の世紀」に聴く

田 口 宇一郎(滋賀県理事員・環境担当 / 第3回世界水フォーラム事務局上級アドバイザー)

市町村 エコの輪 実体験でゴミ意識改革 蒲生町 15

環境滋賀 私の意見論評 18 / 知ってますか? ヨシのこと 21

地球温暖化防止センターだより 22 / 財団のひとりごと 23

ヨシとはどんな植物か

ヨシは、イネ科ヨシ属の多年生草本です。ヨシ属には、ほかにセイコノヨシ(別名、セイタカヨシ)とツルヨシの二種類が含まれます。植物学者によっては、ウラハグサもこの属に分類しています。ヨシは、春に新芽を出し、盛夏に向けぐんぐん伸びて草丈四メートル近くに達し、秋に穂を結んで茎が次第に黄褐色を帯び、冬に葉を落として枯れ草になります。このように、ヨシは地上部については一年生に見えますが、実は地下茎が長年生き残るので、多年生植物なのです。

本来、ヨシは温暖な気候を好む水生植物ですが、ボルガ川流域や北欧などの寒冷地

でも育ち、世界中に広く分布しています。往々、大群落を形成する特徴があります。

歴史

もともと日本語にはヨシという言葉はなく、「記紀」や「万葉集」ではアシと呼ばれていました。ただ、アシの語源については、諸説があって、まだ定まっています。「住吉社歌合」に「なにはわたりには、あしとのみいひ、あつまのかたにはよしといふ」とあるので、平安末期にはヨシの語が登場していたことがうかがえます。同じものでも所変われば呼び名が違う喩えとしては、「難波の葦は伊勢の浜萩」もよく引用

知ってますか？

ヨシのいよ

されます。

以上の経緯から、長い間、アシが標準和名で、ヨシはその別名とされてきましたが、アシが「悪し」と同音なのが嫌われ、「善し」に通じるヨシの方が多く用いられるようになり、今ではヨシが標準和名、アシはその別名と逆転しています。

ヨシまたはアシの漢字には、葭、蘆(異字体、芦)、葦があり、音読みでは、順に「か」「ろ」「い」となります。古く「本草綱目啓蒙」に、ヨシの成長の段階に応じてこれらの漢字を使い分けると記載されていますが、実際には、これはほとんど守られてこなかったようです。

西川 嘉廣

(ヨシ博物館 館長)

琵琶湖とヨシ

「記紀」にいう豊葦原の瑞穂の国は、日本国の美称です。神代の昔から、わが国には豊かなヨシ原がいたるところに広がっていたのです。今でもヨシに因んだ地名が全国に数多く残っていることから、それは明らかです。

若湯座王の万葉歌に「葦辺には鶴がね鳴きて湖風寒く吹くらむ津呼の崎はも」とあるように、古くから琵琶湖にも豊かなヨシ原が存在していました。琵琶湖のヨシ原は、昭和二十八年には、約二六〇ヘクタールありましたが、戦中・戦後の干拓や総合開発の結果、現在では、半分以下になってしま

いました。また、琵琶湖の周辺には、水路で本湖につながる三十七の内湖がありましたが、干拓や埋立によって、その数は半減し、総面積では八〇%が失われ、そこにあったヨシ群落も姿を消してしまいました。

現存する最大の内湖は、近江八幡市と安土町にまたがる西の湖で、この水郷地帯には、日本の原風景を彷彿させる豊葦原が今も残っています。ここに産するヨシは、品質が優れ、遠く江戸時代から江州葦の名で簾・衝立・障子の原料、屋根葺きの材料などとして全国に出荷されてきました。しかし、近年の生活様式(特に、住環境)の変化、代替化学製品の登場、安価な外国産の輸入などの影響で、ヨシの伝統的な需要は激減しています。かつて、西の湖の周りでは、多くの人がヨシで生計を立てていましたが、今やこの業種は、後継者もなく、まさに風前の灯といった状況です。

ヨシの機能

先述の通り、ヨシの産業は衰退の一途をたどっていますが、皮肉なことには、最近、ヨシの果たす機能の重要性がグローバルに認識されるようになってきました。ヨシの働きで特に注目されるのは、水質浄化、生態系保全、景観形成、護岸作用です。

琵琶湖では、昭和三十年代後半から、窒素やリンなどの栄養塩類が湖水に蓄積することによって起きる富栄養化現象が急速に進み、その結果、植物プランクトンが異常増殖し、アカシオ(赤潮)やアオコ(青粉水(華))の慢性的な発生を招き、これが近畿一四〇〇万人の水がめにカビ臭をもたらす原因になったのです。ヨシは、抽水植物であり、水中の窒素やリンを吸収します。また、ヨシに付着する藻類や根圏の微生物の作用で有機物質が分解されます。さらに、ヨシ帯は、汚濁源の吸着・沈殿を促します。ヨシ原は、魚介類、鳥類、昆虫など多様

な生物に生息空間を提供しています。琵琶湖の固有種であるニゴロブナやホンモロコなどの漁獲量の激減は、ブルーギルやブラツクバスといった外来魚の被害にもよりまっています。滋賀県内では確認された二百六十五種の野鳥のうち約四〇%が、産卵・営巣の場、餌場、隠れ場所、塘などとして、ヨシ群落を利用していています。ヨシ原は四季折々、独特の景観美を醸し出しますが、中でも「春色 安土・八幡の水郷」は、琵琶湖八景の一つに数えられています。コンクリートや矢板を使う近代工法による殺風景な護岸と違って、ヨシ帯は、生物に優しく、景観を損なわない自然の浸食防止柵として役立つのです。

以上の理由から、現在、世界各国でヨシ原保全の機運が高まりつつあります。日本では、滋賀県が全国に先がけて、平成四年に「ヨシを守る・育てる・活用する」を三本柱とした「滋賀県琵琶湖のヨシ群落の保全に関する条例」(以下、「ヨシ条例」)を施行しました。「ヨシ条例」では、ヨシの植生状況に応じて、保護地区、保全地域、普通地域を指定しています。また、この条例では、十年間で三〇ヘクタールの植栽による人工的ヨシ原創生を目指しましたが、結局、目標値の三分の一しか達成できませんでした。ヨシ群落の破壊はいとも簡単ですが、造成には多大な費用と年月が必要なのです。

良質のヨシ原を維持するには、またヨシが水質浄化機能を発揮するためには厳冬のヨシ刈りとそれに続く早春のヨシ焼きを年々歳々繰り返さなければなりません。目下、最大の課題は、なんといつても刈り取ったヨシの活用法の新規開発です。伝統的用途に替わる、大量需要が見込める付加価値の高いヨシ製品の開発こそが現下の急務なのです。

「いのち」きらめく恵みの湖を、 未来の子どもたちに伝えるために

遠い日に遊んだふるさとの川には限りない「いのち」があふれていた。

新しい季節を告げる澄んだ風がどこまでも広がるヨシ原を吹き抜けていった。

もう一度、あのかげがえのない自然と手をつなぎ、心と心を結ぶことで呼び戻したい。

ふるさとを愛してやまない一人ひとりの想いがひとつになったとき、その協議会は生まれた。

今回の巻頭特集は設立準備から数年を経て多彩な活動の輪を広げ続ける

東近江水環境自治協議会をクローズアップした。



丹波 道明氏



西川 嘉廣氏



山岡 完右氏

東近江水環境自治協議会会長	丹波 道明氏
東近江水環境自治協議会副会長	西川 嘉廣氏
淡海環境保全財団副理事長	山岡 完右氏

まず、東近江水環境自治協議会の設立の目的を、会長のほうからお話しいただければと思います。

丹波 琵琶湖にはいちばん大きな西の湖と呼んでいる内湖があります。昔は琵琶湖の周辺に随分多くの内湖があつて、これが琵琶湖に対して環境保全の役割を果たしていました。いちばん大きな役目はやはり水の浄化。上流から流れてくる水を浄化して湖の中へ流し込むという役割です。次に琵琶湖の固有種、いろんな魚類の産卵・ふ化場所としての役目も担っていました。それが、戦争中から戦後にかけての食糧不足でどんどん干拓が進んだわけです。干拓が進むと水辺や内湖がかえりみられなくなって水が汚れるままになっていきました。私の子どもの頃には、ほんとうに豊かな命がありました。特に魚や貝ですね。実に多くの魚が泳いでいました。足元を見れば、貝類もいっぱいでした。ところが、サラリーマン生活を終えてふるさとへ帰ってくると、もう見る影もない状態です。これまでと景色はさほど変わらないけれど、水の汚濁は非常に顕著でした。これは大変なことだと危機感を持ちました。そんな時に、近江八幡と安土の行政の方々が、長命寺湾・西の湖環境保全協議会をつくり、西の湖の自然観察会、長命寺湾の自然観察会、さらに西の湖へ注ぎ込む各河川を上流までさかのぼって、現状を把握する観察会を何度も開かれたので、これに参加したわけです。やがて、参加したメンバ

ーの中から設立準備委員が選ばれました。平成十一年の十一月のことです。その後、毎月一回、計九回の設立準備会を開いて、真剣に議論を重ねました。その結果、西の湖と西の湖から流れ出る長命寺川、北之庄沢を経て八幡堀から長命寺湾に流れ出る二つの流れの内水域をただ単にきれいにするだけでは不十分で、上流にさかのぼって森も美しくなければ川も生きてこない、湖も死んでしまう。森と湖ともつ切り離せない存在なのだという認識をメンバー全員が持ちました。それで名前をですね、当初は長命寺湾・西の湖環境保全協議会を想定していたわけですが、東近江全体の水域を視野に入れるということで、現在の名称になりました。平成十二年の七月のことです。

西川 先生は副会長をお務めになつてるわけですけど、同じように設立の時に参加されて、その時のお気持ちなり、ご自身のお考えなり、それをお聞かせいただけますか。

西川 私はずっと大学におりまして、こういう問題にはそれまで疎いというか、関心がないというか、そういう状態でした。しかし、私の定年が迫つてる頃に準備委員会がありまして、私もルーツは近江八幡で、代々近江八幡に先祖が住んでましたので、声をかけていただきました。それならばということに加えてもらったよつなわけです。何の役にも立たない唯一の理事です(笑)。

丹波 そんなことないんですよ。ものすごい博識で、実に面白い先生です。

十三夜の名月の日に
多数の外国の方々を「ヨシの国」へ

この会が発足準備から数年が経つてるかと思いますが、主だった活動内容あるいは非常に反応のあつた事業などを少し聞かせていただけますか。

丹波 まず、子どもを西の湖に引つ張り出さうという活動を元漁師の会員の方が試みておられましたので、これをバックアップすることにしました。発足の翌月のことです。その後、湖沼会議のプレ会議という位置づけで、十一月「リビングレイクス2000」に参加された外国の方々のサポートを私たちの会でできないかという依頼を受け、快諾しました。全員で「ああでもない、こうでもない」と相談しながら進めました。迎えるのは午後三時頃から夕方にかけてだったので、月令はどうかといったことも調べた記憶

があります。当時、残念ながら西川先生のヨシ博物館ができていなかったもので、「円山の船着場から直接船に乗っていたら、西の湖をご案内しながら、湖の状況やヨシの現状を見ていただく」ということで意見がまとまりました。夕刻に、ちよつと十三夜の名月が生まれて、なかなか素晴らしい演出になりました。集落の案内も計画に入っておりまして、街灯のない場所には手づくりのぼんぼり

丹波 道明氏



を灯し、ご案内しました。

まさに会をあげての手づくり企画ですね。外国の方は何名ほどだったのですか。丹波 五十五名お見えでした。大歓迎になったわけです。おばあちゃんが出てきて通訳さんをつかまえて「私、もう九十越えとるんよと言ってくれ」なんてね。外国の方が「ほーっ」と感嘆されると、「感心してくれはった！」なんて後々まで嬉しそうでした。それからお寺の方にもご案内して見ていただきました。言葉は通じなくても、心から解り合えたという実感があります。それから、雅楽も聞いていただきました。帰りはですね、篝火の中を舟と車で宿舎へ帰っていただきました。これも、非常に感激していただきましたよ。これが、発足した年のいちばん印象深い行事になりました。西川 いまお話に出ました篝火も、間伐材を燃やしたものです。環境保全の一環というわけです。

外国人の方々はいずれも環境の問題についてテーマを持って日本に来られたと思います。ご意見などは出しましたが。丹波 いろいろお聞きした中では、なぜヨシに我々がこだわっているのかということがよく解ったという感想が印象に残りました。これまでの会議でもヨシの話が度々出たわけですが、もう一つ実感として理解できなかったのが、今回の催しで納得できたというわけです。

西川 あの時、困ったのは、通訳者が足りないということでした。私が乗った船は、たまたま通訳がおられなかった。聞かれるままにお答えしましたが、どこまで満足していただけたか、心もとない感じがしました。特に熱心に聞いておられたのはポルトガルの女性の方でした。日本ほど外国では生活の用具・素材としてヨシは活用していないと思うんですね。ところが、日本に来てヨシがいろんな生活の現実の場で使われてきたことに非常に関心をお持ちでした。日本人よりも興味をお持ちといった感じでした。

丹波 皆さんも住民組織の代表としてお見えになりましたので、余計に波長が合ったんじゃないかと思えますね。その後、こちらから事務局のあるドイツを訪ねる機会を得て訪れた人たちが、大歓迎を受けました。ベンツの工場を見学したり、国境の近くにある湖を探訪したりしました。「この前は船に乗せていただいたので、今度はこちらの船で周遊していただきます」ということでした。あの催事がきっかけで、さらに交流を深めることができました。

ヨシ保全を図る財団として
私たちもできる限りのお手伝いを

山岡さんはこのような活動を、当初からご覧になってると思いますが、協議会に関する感想をちょっとお聞かせいただけますか。

山岡 私もこの仕事をさせてもらう以前は行政の方で琵琶湖の総合保全の計画づくりに、初期の段階から携わっておりました。現在、進められている「マザーレイク21計画」です。そのような中で水道のようなハード面は着実に整備しているわけなのですが、やはり最後に残るのは、その周辺に住んでおられる住民の方々が生活をどのように見直していくか。かつてどのように取り組み、どんな暮らしぶりであったかを再考していただくといった点にたどり着くわけです。「マザーレイク21計画」を推進する上でも、特に住民の方々、流域単位での取り組みが重要になってきます。その一つとして、東近江でこのように活動をしていただいているわけです。流域というのは山の上流・中流・下流、そして最後は琵琶湖がすべて引き受けて、その処理をしなければならぬわけですが、途中の段階で流域の方々の取り組みが積極的に進んでいけば、限りなく昔の状態に立ち返ることができるはず。同様に、東近江の場合も近江八幡と安土、西の湖周辺だけではなく、流域の八日市などすべての地域が参画していく必要があります。ただ、現実的には上流と下流の問題ですので、なかなかむずかしい問題があるわけです。たとえば、大阪湾と琵琶湖との関係と同じです。どうしても、上流の問題にされがちなのです。協議会の場合も、はじめは八日市さんも参画されて



西の湖自然観察会

れた出発点にあるのではと思います。県にも琵琶湖のヨシ群落の保全ということに着目してヨシ群落の保全条例がございませう。その保全条例に基づく琵琶湖のヨシ群落の維持管理や刈り取りを、メインの仕事にしているのが私どもの財団です。西の湖は私有地のヨシではございませうが、同じ立場で琵琶湖を守るためにヨシ群落の保全ということについて、それをメインに据えながらお取り組みいただければと願っております。メンバーも増えてきてるようですし、取り組みも身近な事から多彩に行っていたら、県が考えているような方向に沿って一つの活動として広がっていくことを大いに期待いたしております。

丹波 竹田勝博さんという「ヨシ刈りボランティア」の先駆者で、過去十年間このボランティアを続けておられる方がいます。その「ヨシ刈りボランティア」を会員でもっと大々的にバックアップしていこうということで、平成十三年度は、二月の十一日に「西の湖宝探し」を実施しました。みんなで「宝物」を見つけてくださいという企画です。それは風の音、波の音、ヨシの匂い……といったものです。そのよつな「宝物」を探していただくことで、関心を高めていくという試みです。また、西川先生にお話をしていただき、九州からはヨシベン画家の諸藤先生をお招きして絵を教えてください、かわらみユーシアムの館長の菊井さんにヨシ笛を吹いていただいたりしました。子どもた



ちを集めてヨシ昔なんかも築きました。みんな実にも楽しそうでした。ヨシ刈りをした後は、おにぎりとお汁と漬物を食べながら、全員で水のことやヨシのことを話し合いました。

実際に面白そうな企画ですね。お話を聞いて聞いているだけで、風の音やヨシ笛の音色、子どもたちの元気はつらつな表情が目に見えたりする感じがします。そ

の年、他にも興味深い催しがあったようですが…。

丹波 会の活動に火をつけようとか何か大きなことをやろうと話合い、三部構成の「流域フォーラム」という催事を六月に開催しました。テーマは「いのち」です。第一部は、地域に呼びかけて「ヨシ笛アンサンブル」を結成し、その演奏を行いました。第二部では、滋賀県立大学前学長の日高先生、京都精華大学の嘉田先生、そして狂言師の木村先生の鼎談^{ていだん}をしていただきました。さらに第三部では、狂言の木村先生にお願いして創作いただいた環境創作狂言「琵琶の湖」も上演しました。かなりの予算が必要でしたが、全員で頑張ってチケットを売り、助成金なども得て、なんとかやりくりしました。その時、実感したのは五、六名でもよいから、ほんとうに一生涯懸命やることとする者が集まれば、かなりのことが実現できるということでした。これは、大きな自信になりました。私たちの大きな心の財産です。グループもこれによって活気づき、結束も深まりました。

西川先生がおはじめになった「ヨシ文化話会」について少しお話を聞きたいのですが、具体的にどのようなことをしておられるのですか。

西川 その都度、私が勝手にテーマと言いますか、内容を決めてやっております。平均月一回ですね。不定期なんですけれども、たとえば「ヨシと食文化」「ヨシ



と音楽」「ヨシにちなんだ諺・故事」「ヨシと紋様」「ヨシと万葉集」「ヨシと童話」「ヨシと舟」「ヨシと料理」「ヨシと生活デザイン」といった具合に、いろいろとお話をしてまいりました。幸い、長く続いております。毎回、テーマが異なるので、関心をお持ちの方が来られるわけです。昨年のクリスマススイブには「ヨシと音楽」と題してヨシにちなんだ音楽会を催しました。その時は六十名ほどお集

まりいただきました。いわば、スペシャル版ですね。我が会の忘年会も兼ねての企画です(笑)。ソプラノ歌手の方にもお越しいただいて非常に盛況でした。二十数曲ご披露しました。それこそ、クラシックからシャンソン、歌曲、演歌、雅楽まできわめて多彩です。ヨシに因んだ曲は予想をはるかに越えるほどあります。歴史があるから、それが文化に反映されるわけです。たとえば、「早春譜」。それから「慌て床屋」にも出てきますね。これらは日本の典型的な歌曲ですから、外国に目を移せば、ドイツ歌曲にもヨシが登場します。たとえば、「葦の歌」なんていうのにもあります。楽器でもフアゴット、クラリネット、オーボエ、サクソフォン…これはいずれも、現在もヨシの差し込みで吹く。ですから、クラリネット協奏曲はヨシに関係ありと、こうなるんですね。このようにして選んでいくと実に数多くあるわけです。調べていくと、面白いですよ。

これは、知りませんでした。なるほど



ヨシ舟作り



すごいですね。歴史があるから音楽という文化と交響していくわけですね。それにしても、よく調べておられますね。山岡 それは、なんといつてもヨシ博物館の館長をしておられるわけですから詳しいですよ(笑)。でも、こうしてお聞きするとほんとうに興味深いですね。ヨシには昔から永い時の流れの中で培われた文化があることを実感します。

現在、ヨシの需要は全国的に皆無に近い状態

ヨシについては、去年も取材させていただき、本誌でもご紹介しましたが、まだご存じない方々もおられると思います

西川 嘉廣氏



ので、もう一度、ヨシの現状などについてお聞かせいただけますか。

西川 まあ、山岡さんが同席されているのに、私が申し上げるのもなんですが、ビジネスの視点から見れば、もう絶滅しているといっても過言ではありません。

我が家の代々の家業でしたから、特にこのようなボジションでお話するわけですが、全国的にもう需要がほぼ皆無なので、一つには日本人の生活様式が変わったのが原因です。もう一つは中国などからとても日本の人件費では太刀打ちできない安価な商品が入ってくることです。

たとえば、昔からの大きな需要といえば、屋根葺きの材料があります。ところが、これも建築基準法二十二条によって、火災の危険があるということでもまず許可が下りない。もう一つは、^{すたれ}簾・^{ついで}衝立・^{しょうじ}障子などの伝統的な家屋のインテリアですが、これも需要がほとんどありません。一方、滋賀県ではヨシを増やそうとしています。役に立たない、使いだのないモノを増やそうとする。これは、なぜなの

かというところ、需要そのものはないけれど、ヨシにはさまざまな優れた機能があり、これが明確になりつつあるからです。

ヨシの優れた機能とは具体的にどのようなものですか。私たちにも解るように易しく教えていただけますか。

西川 大きく分けて四つです。水質浄化、生態系保全、景観形成、そして浸食防止。まあ、現在、世界で言われているのを大雑把に言うとその四つです。その四つの機能があることが世界中で認められるようになってヨシを増やそうということになったわけですね。ただし、問題なのは増やした場合、刈り取りをしないと駄目なんです。これには人件費が要る。人件費に釣り合う需要がなければ、民間では増やしたくても増やせない。これが現状です。矛盾が生じているわけです。事態はほとんど硬直しています。付加価値の高い伝統的用途に替わる新規用途が未だ開発されていない。僅かに利用されているのはヨシ紙と腐葉土だと思っております



が、ヨシ紙については木材から作る紙に比べて値段がべらぼうに高くなる。腐葉土についても人件費に見合う価格で売れるとは到底思えない。やはり、このような問題は民間の一企業だけでは荷が重過ぎるわけで、財団のような公的な組織が積極的に動かないと、息切れを起こして続かない。新しい生活デザインに結びついた大量需要を探り当てる必要があります。幸いなことに、現在、大学の若い学生たちが関心を持ちはじめきており、さまざまなアイディア会議を開いて、「こんな用途はどうだろう」といった具合に活発に動きはじめています。自発的な研究としてやってくれてる。その中から思いがけないモノが飛び出す可能性に期待を寄せているといった状況です。

山岡 いま、西川先生が指摘されたヨシの機能にあらためて注目して、保全条例をつくり、少しでも増やそうと刈り取りを行っていません。しかし、確かに大量に商品化して捌けるような需要は残念ながらありません。そのあたりで、先生がおっしゃったように、さまざまな所で何とかそれを商品化して採算が合う形に持つていこうと努力もされています。そういうことにも期待をしながら、私たちも財団としての役割を重く受け止め、たとえば、民間では手を出しにくいというか、出せない所については私どもで刈り取りを考えています。私どもは腐葉土と紙が中心ですので、腐葉土については全国各地のしかるべき所へサンプルを送ったり

しております。菊に良いという宣伝文句も入れて…。実際、非常に効果はあるのですが、まだ、一般的には定着していません。やはり、安価なものをお求めになるわけです。

西川 私の家には、腐葉土が商品として注目される以前からヨシの捨て場に腐葉土をもらいに来る方がおられます。菊づくりの肥料にされるわけです。全国の品評会で優勝しておられるような愛好家です。昔からヨシの腐葉土が菊作りに不可欠だったので。ちなみに、最近ではトラックで、どつさりと持っていかれる方もあります(笑)。話は変わりますが、この頃、甲虫なんかは非常に貴重でしよう。デパートなんかでも実に高額で売られている。ヨシの捨て場では、非常にこの繁殖が良いのです。だから、甲虫あたりを育てるのも面白いのではと半分本気で考えています(笑)。

ヨシを生かす研究の先進国はドイツ 環境改善の大きな糸口

ヨシと環境の問題に戻りますが、世界的にはどのような動きがあるのでしょうか。日本よりも進んでいるのでしょうか。西川 先進地はドイツです。そして、ヨーロッパの先進十カ国がドイツに学んで十年間のヨシによる水質浄化のプロジェクトを行いました。準備段階はすでに終わっており、ヨシが汚濁を改善するのは間違いないという結論を出しています。

現在は、なぜそうなるのかといメカニズムの解明に取り組んでいます。たとえば、ヨシを使った浄水設備の構造をどうすれば、効率が高くなるのか。水を縦方向に流すのか、水平または階段式か。水を流す時の汚濁の程度と水流の速度は…といった研究に発展しています。たとえば、ポーデン湖がヨシの問題についていちばんの先進事例にしたいと思います。この湖はスイス・オーストリア・ドイツにまたがっており、国際協調の上でやっています。面積は琵琶湖の八割で、ほぼ似ています。ドイツなどでも失敗は何回も繰り返しています。でも、それはすでに計算済なのです。失敗が生じるのは当然という考え方です。むしろ、失敗こそがもっとも良い参考になるという発想です。琵琶湖でもヨシ条例で、十年間で三十ヘクタールを植栽しようとしたのが、目標値の三分の一に終わりました。しかし、そ

の方法論の検討、努力や過程が世界にとつては貴重な参考資料になるのです。丹波 水問題が中心なのは当然ですが、その上に、いま問題になってます地球温暖化、二酸化炭素の吸収についても大きな役割を果たしているということが、明確に証明できればと期待しています。ヨシの生命力は抜群です。わずか一日で五センチ前後も成長します。これが水中の窒素・リンだけでなく、二酸化炭素を吸収して伸びていく。西川 その通りだと思います。ヨシというのは植物のグローバルな分布から言えば、いちばん広範に分布している、それだけ生命力がすごいわけです。これを本気になって巧みに活用すれば、現在の世界が抱えてい深刻な環境問題を大きく改

善する糸口になるはずで。

第一次産業に従事する人々に使命感を背景にした揺るぎない誇りを

丹波 ヨシの需要は全国的に皆無に近い状況という話が出ましたが、川を遡って上流域の山へ行きますと日本の木材もまたヨシに近い状況にあります。環境問題を抜きにして経済問題だけを考えると、わが国の森林もまた競争力を失っているのです。ヨシ原を守る人に跡継ぎもなく放置されています。中流域の水田稲作もまた同じ道をたどりつつあるように思います。

わが国の原点は「いのち」満ちあふれる「豊葦原瑞穂国」です。いまやこの原点が病んでいます。私たちの東近江水環



境自治協議会は、西の湖を中心とした安土から近江八幡にかけての内水域の水の浄化と景観の美化を活動の中心に据えつつ、川をつたって鈴鹿の山までそれぞれの地域で環境に取り組んでおられる方々と手を組んで、さらには琵琶湖から淀川を視野に入れ、この「病氣」の治療に取り組みたいと考えています。互いの小さな輪を重ね広げていくことが何よりも重要なのです。

環境問題というのは、すなわち私たち一人ひとりの自分の問題なのです。結局、暮らして仕事の在り方を変えて行かないと環境問題は解決しない。しかもそれを急がないと駄目なんです。ところが、やっぱり便利さや経済といった現実にはなかなか勝てないわけですね。そこで、ビジネスの中でいちばんへたり込んでる所はどこだろうと見てみると、やはり第一次産業です。たとえば、山の暮らしが成り立つようにしていかなければだめなわけです。そのためには山を守る人に対して守り賃を出さなきゃいけない。現在、すでに多くの人々が山を離れてしまっていますが、なんとかして山を守り育てる専門家を育てないと山を保護する技術の伝承が途切れてしまいます。また、滋賀県の田畑の九六%までは兼業農家です。県下には働ける場所が数多くありますので、そこへ行って働かれるわけですが、そうしているうちにその収入のほうが大きくなる。勢い軸足がそちらへ移る。東近江全体の、多くの林業者・農業者の

方々に集まっていたら、これからの生活をどうしたら良いか、これからのビジネスをどうしていくのか、いうことを互いに考えてみたいのです。

たとえば、ヨシ原の保全についても同様です。ヨシ原をナシヨナルトラストといたかたちで買い上げていただく。それを、若い人々も含むボランティアで保全していく。または、専門的に守ってくれる人々や組織を生み出していく。それが誇りに感じられる仕事にしていき、保全を図るわけです。

東近江水環境自治協議会としての今後の活動のテーマや具体的な施策などを、いまあらためてお聞かせいただけますか。第一次産業分野の重視、地域アジェンダづくりなど、いくつかの明確な指針があるようですが、そのあたりのことを

丹波 そういことですが、私たちの協議会の原点は二つあります。一つはヨシの保全。もう一つは、西の湖の水質・景観の保護です。この二点を協議会の核として、私たちは活動を広げ、上流域に遡っていきたくと思っています。繰り返しになりますが、個々では成し得ないことも相互に結び力を合わせれば、できなかつたこともできるようなのです。その意味でも、私たちの活動はこれからであると考えています。先の目標を達成するためには、いまも申し上げたように、第一次産業の分野に取り組みの重点を置く必要

があります。水とのかかわりがきわめて大きな産業であり、治山・治水に直接影響する仕事だからです。温故知新の視点を大切に次代に向けた仕事と暮らしのビジョンを地域に根差した討議の中から見出していかなければなりません。農業も林業もきわめて高度で総合的な知識と技術が要求される分野なのです。自然との共生を考える時、その最前線に立っているのがこれらの仕事に従事する人々であるといっても過言ではありません。昔の言葉で言えば百姓ですが、つまり「百の匠」がいま、まさに求められていると実感しています。また、点から線へ、線から面へと活動を拡大していくために地域アジェンダづくりは非常に重要です。その一環として東近江環境保全ネットワーク参加グループ、東近江地域振興局、セブンドロップス、琵琶湖市民研究所などとの連携強化も図っています。共催イベント、ワークショップ、フォーラムなども検討中です。さらに協議会として来年度開催の「第3回世界水フォーラム」に地元NPOとしても参画を予定しています。

山岡 今後どのように展開されるかという点についても、私も財団の立場でも、同じくヨシ保全を図る仲間ということとございますので、大変関心を持っておりま。また、同じ立場で何か協力さしていただけることがあれば、ぜひお手伝いさせていただきますと思っています。

水質汚濁による病気、世界に広がる水不足、頻発する洪水、干ばつや砂漠化、水をめぐる紛争…。いま、私たちは水にまつわる数多くの深刻な問題に直面しています。

これを解決する糸口を見出し、新たな行動を起こすために、来年三月には、滋賀・京都・大阪を会場として「第3回世界水フォーラム」が開催されます。これに先立ち、滋賀県理事員(環境担当)第3回世界水フォーラム事務局上級アドバイザー田口宇一郎さんにお話をお聞きしました。

「環境人リレーインタビュー21」③

滋賀県理事員(環境担当)
第3回世界水フォーラム事務局上級アドバイザー

田口宇一郎さん

世界に眼を向け、行動すべき時が来ている

最初に、来年三月開催の「第3回世界水フォーラム」に向けての第3回世界水フォーラム滋賀県委員会のビジョンやバックボーンになるお考えなどをお聞かせいただけますか。

田口 一九八四年に第1回会議を滋賀で開催し、世界各地をめぐる二十一世紀の幕開けとともに再び発祥の地・滋賀で、「里帰り会議」として、昨年十一月

に第9回世界湖沼会議が開催されました。今回の会議では十七年前に比べて琵琶湖をはじめ、世界の湖の現状がどのようになっているのかを振り返り、真摯な反省を込めて率直な議論が行われました。そして、第1回会議で採択された「琵琶湖宣言」、一九九五年の第7回会議で採択された「霞ヶ浦宣言」が、現在においても重要な提案であることを再認識

すると同時に、望ましい湖沼環境再生にむけての懸命の努力にもかかわらず、依然として環境悪化が続いている世界湖沼の現実を踏まえ、旧「琵琶湖宣言」に「統合的流域管理の推進」と「資金調達に関する諸方式の検討」の二項目を加えた「琵琶湖宣言2001」が採択されました。

この宣言の精神を「第3回世界水フォーラム」にしっかりと引き継いでいかなければと考えています。今回の世界水フォーラムではこれまで二回の会議での議論を踏まえ、水問題を解決するための具体的な行動に結びつく議論がなされ、「水行動報告書」が採択される予定となっております。この中で、琵琶湖をはじめとする湖沼の保全、再生には流域全体を視野に入れた統合的管理が必要であり、その

ため流域に関わる国家間、国と地方自治体間、地方自治体間、および上・下流域間の連携と相互理解のもと、それぞれの役割分担を明確にし、流域単位で統合的に湖沼環境の再生に取り組む方策について議論をリードしていくべきだと考えています。フォーラム開催期間中は滋賀でも数多くの分科会が開催されます。ぜひ、この機会に「湖沼保全」についての具体的な議論が集中して行われ、上・下流が一体となった湖沼保全のための取り組みの必要性と具体的な取り組みが、「水行動計画」に位置づけられるよう積極的に働きかけて行きたいと考えています。

開催場所は滋賀・京都・大阪の三カ所ですが、これは琵琶湖・淀川流域という一つの巨大な流域を視野に入れたものであると考えればよいのでしょうか。

田口 そうです。第1回はモロッコのマラケシュ、第2回はオランダのハーグ、第3回の開催地がアジアモンスーン地域の日本で開催されることとなり、流域という視野から水環境の保全に熱心に取り組んでいることが評価され、琵琶湖・淀川流域が選ばれたのです。

世界にまで視野を大きく広げて水問題を考える格好の機会

そういう意味でも先程お話された琵琶湖というものが大きなウエイトを占めることとなりますね。湖沼があつての流域

なのですから……。ところで、日本の水環境というのは、世界的に見てどのような位置にあるのでしょうか。

田口 日本では、どちらかというと質の面でいろいろ心配されていますが、世界的に見ると、量の確保が問題です。また、質においても日本とは比べものにならないほど汚染された水を使わざるを得ないような状況にある国や地域が非常に多いのが現状です。貧困の中で日々の飲料水や生活用水をどのように確保していくかが、非常に大きな問題になっています。このような意味においても、私たちはもっと「水」という欠くことのできない資源に幅広い関心を持たなければならぬと思います。「水議論の壮大なマーケット」それが、世界水フォーラムです。さまざまな人々がそれぞれの分野や立場に立った視点からの主張と、立場を越えた対話が行われます。世界にまで視野を広げて水問題を考える格好の機会になればと願っています。

世界と日本の水環境のお話が出ましたが、地元滋賀県における水環境状況や施策などをお聞かせ願えますか。

田口 琵琶湖の出口は瀬田川と京都疏水しかないわけですから、一旦長雨が続きたり、台風が来たら琵琶湖の水位が急激に

上がり、田畑や家屋等が頻繁に浸水しました。このため、瀬田川の疎通能力を高めるための浚渫をめぐる「争い」の歴史が延々と続いてきました。また、山々を守るということが水を守るのだということで、田上山の禿げ山の周辺を甦らせるなど、植林事業が積極的に行われてきました。そうした私たちの先人の努力を決して忘れてはなりません。そして昭和四十七年度からスタートした、琵琶湖総合開発では治水、利水、保全を三本柱にした事業が推進され、水質保全に欠かせない下水道事業も急激に進み、わずか三十年ほどで下水道の普及率が全国のベストテンに入りました。しかしながら、琵琶湖の水質はと申しますと、依然横ばいの状況です。この間に人口が八十万から百三十五万人に増えていることからすれば、横ばいという

人口の急増、産業の著しい発展によって水不足が増大しており、現在、アジア、アフリカなど31カ国で水の絶対的な不足に悩んでいます。また、水不足が深刻な食糧不足をもたらしている地域も広がっています。

水が原因で、年間500万～1,000万人が死亡

12億人が安全な飲料水を確保できない

8億人が1日2,000カロリー未満の栄養しか摂取できない

2025年には48カ国で水が不足する見込み(国連資料)



のはそれなりに評価できるのかもかもしれませんが、それが回復に向けての努力がまだまだ求められます。そこで平成十二年三月に、琵琶湖総合保全整備計画「マザーレイク21計画」を新たに策定して、二十年后には昭和四十年代初めのきれいな水質を取り戻そうと県民総ぐるみによる琵琶湖の総合保全の取り組みをスタートさせました。

話は変わりますが、前回の湖沼会議の時に大学生の方々もボランティアで積極的に参加しておりましたが、たとえば新世代の方々に対するご要望などはあります。

田口「マザーレイク21計画」では、自分たちの身近な河川や自然環境を守ることにひいては琵琶湖の保全につながることであるという考え方のもと、県民一人ひとりがそれぞれの河川流域毎に身近な目標を設定し、みんなの手で河川や琵琶湖を守っていくことを提唱しています。流域単位で協議会を設置してアジェンダづくりが始まっています。こうした取り組みが活発になり地域ぐるみの水文化として定着することが大変重要です。

その一方で、理屈抜きで琵琶湖のファンを増やしていくことも大切だと思っています。平成十年度の「We Love びわ湖」TV放送をきっかけに、番組出演者や県内各界の人たちがボランティアで集まり、琵琶湖の魅力や価値を伝え、県内外の琵琶湖ファンを獲得しようという



運動が始まりました。その中で、We Love びわ湖の会のメンバーや行政が、BSP（びわ湖ソング・プロジェクト）を結成し、「宇宙船BIMAKO号」のCDを出すなど「We Love びわ湖」の気運も盛り上がり、多くの若者を中心に、県内でのライブ活動をはじめ、大阪の天神祭で、びわ湖のPRをするなど、幅広い取り組みが展開されています。まさに民間レベルで上・下流が一体となり母なる琵琶湖を守ろうという「うねり」であり、そのうねりがだんだんと大きな広がりとなっていくためにも、今後若者のエネルギーに大いに期待します。

増え続ける地元地域での多彩な活動地道な努力の継続が何よりも大切

現状をご覧になっていて、皆様の保全の意識は他と比べてどうですか、かなり高いと感じますか。

田口 それぞれの地域でいろいろな取り組みが行われています。たとえば、赤野井湾流域ではシジミや蛸をもう一度取り

戻そうという身近な目標を掲げて環境の改善に取り組んでおられます。このような活動は数多くみられ、しかも年々広がりを見せています。このような、地道な努力が何よりも大切です。「第3回世界水フォーラム」の開催によって内外から数多くの方々が滋賀県にいられて、それぞれの国や地域での水環境保全に向けた最新の情報を持ち寄り、立場を越えた対話が行われることは、私たち県民にとって、きっと大きな刺激になるものと思います。

県民の方々が「第3回世界水フォーラム」に参加することはできるのですか。

田口 できます。また、自分たちでプログラムを立ち上げて、さまざまな方々と水環境に関する討議を積極的に行っているだけだと願っています。すでに、そのような動きが出てきています。フォーラムをはじめ、いろいろなセッションをやるということ、たとえば、東近江水環境自治協議会の方々が中心となっていて、多くの人々の参加でヨシ舟づくりが始まっています。また、世界湖沼会議の時も創作狂言を行っていただいたのですが、それを新たにもう一本作って発表しようという準備が始まっています。さらに、地元の企業で水環境の保全に取り組んだり、あるいはもつと積極的にエコビジネスにつなげていこうとがんばっていたところも数多くありますが、これらの企業の皆様にも、積極的にご参加

人口増加や産業発展に対し、下水道等の衛生設備の整備が追いつかない途上国を中心に水質汚濁が問題となっています。

途上国における病気の80%の原因は汚れた水

水がかかわる病気で、子供たちが8秒に1人ずつ死亡

世界人口の50%に対し、衛生設備が未整備

淡水魚の20%の種は、水の汚染により絶滅の危機（世界保健機関資料他）

ただだけだと願っております。今度の水フォーラムでは経営責任者によるパネルも計画されています。また、最近、びわ湖環境ビジネスメッセの開催などを通じて、環境保全をテーマにしたエコ製品やシステムの開発も盛んになってきていますので、この機会に情報交換をはじめ積極的な交流を図っていただければと思います。

人口は激増するが水は限りある資源
日本は世界有数の水の輸入国

「世界水フォーラム」は、世界の各地に見られる「水や食糧の不足」「水質汚染による不衛生な生活環境」「洪水の危機」など、水に関するあらゆる問題を解決するためにスタートしたわけですが、世界の状況はかなり深刻なのでしょう。

田口 六十億の世界の人口の二割にあたる十二億の人々が、安全な水を確保できずに困っているといわれています。これから人口は増えるけれども水は増えない。そうすると、飲料水としての水も、食糧増産のための水も、さらに必要になるわけですから、このままでは状況はますます悪化します。現在、日本では食糧の四〇%を海外に依存しています。これから食糧の生産に要する水の量は膨大なものになります。さらに、工業製品や木材の輸入までを含めると日本がどれだけ多くの水を世界から輸入しているかが想像されます。このことを、琵琶湖・淀川流域にあてはめても同じことが言えると思

います。京都、大阪や兵庫に住む人々に、生活用水や工業用水などの「見える水」のほか、「近江米」や「近江牛」、野菜など多くの農産物や工業製品等とおして、「見えざる水」が供給されています。

あるデータでは、台所から捨てられるゴミの四割が食べ残しと賞味期限切れといわれていますが、これは、輸入した水をそのまま垂れ流しているようなものです。水も他の資源と同じくあるいはそれ以上に、限りある資源なのです。二十一

世紀は水が原因で国際紛争が起こる可能性がきわめて大きいと国連の関係者の方々が指摘されています。水資源の問題は二十一世紀の非常に大きなテーマなのです。地球規模でものごとを考え、一人ひとりが足元の問題から取り組む。これが水環境に対して責任あるこれからの生き方になるのではと考えます。

「第3回世界水フォーラム」では、そのあたりのテーマも細やかに討議されるわけですか。

田口 もちろんです。日本人同士の議論では、このようなテーマが議題になることは少ないかもしれませんが、世界の国々から参加される方々が、それぞれの実情を踏まえて討議されると、これらの深刻な問題が続々と出てくることになりました。世界的な視点にたった時、日本の課題も明白になってきます。その意味でも重要なフォーラムです。今回は三回目のフォーラムになりますので、抽象的な議論ではなく、次代を見つめた具体的な

水行動計画を議論しようという準備が進められています。

貧困と汚水の悪循環
途上国の病気の八〇%は水が原因

実行ですね。そういう意味では二十一世紀の初頭の開催であり、タイミング的にも好機ですね。それにしても、水はすべてのベースになっていることを再認識しました。

田口 たとえば、石油が枯渇したとしても、自然エネルギーなどに転換することも可能ですが、水がなくなれば生きられない。人間そのものが大半は水なので……量だけ確保すれば質のほうは何とでもなる、水質浄化方法は科学的にいってもある、とおっしゃる方もおられますが、私はそうは思いません。マニラの貧民街に住むマニラ大学の女子学生の言葉が心に残っています。「私たちには環境という言葉はありません。朝起きたら、今日一日をどう生きるかということしかありません。家畜の糞尿が混ざった汚水を上手にすくって、飲み水や生活用水に使うしかないのです」。貧困と汚水の悪循環。これが原因で年間一千万人が死亡し、八秒に一人の子供が亡くなっています。途上国における病気の八〇%の原因が汚水です。

ドイツ人の陸水学者が次のように語っています。「水なくして命なし、水なくして文化なし」。二〇二五年に世界の人口が八十億人になり、四十八カ国で深刻な水不足が起きると予測されています。さらに温暖化で干ばつが拡大してきます。たとえば、雨の降らないエジプトでは、水供給をナイル川に完全に依存しています。このナイル川を育む雨の大部分はエチオピアに降っています。そしてこの国の人口は、急速に膨張していますが、急激に増加する人口を養うため、ナイル川上流の水をどんどん使用すればたちまちエジプトは水飢饉に見舞われてしまいます。人口増加や食糧増産などの絡みが、

60億人を突破した世界人口は、
2025年には80億人に達すると予想され、
水不足や洪水などによる被害が増大し、
地域によっては危機的な状況になることも考えられます。
すでに水をめぐる国際紛争にまで至っている地域もあります。

これまでもお話したように、世界各地の流域間で紛争を引き起こす原因になるわけです。… けつして危機感を煽^{あお}っているわけではありません。数多くの最新情報^{あほう}が物語っているのです。繰り返します、このことをしっかりと私たち一人ひとりが認識することから、ほんとうの水問題の解決に向けた取り組みが始まるのです。

日本の国内における状況はどのようなものですか。水不足の傾向は出てきているのでしょうか。

田口 一番気になっているのは地下水です。量的にも質的にも全国的なデータは把握されていないのではないのでしょうか。水に恵まれている地域ほどふんだんに水を使います。でも、なくなる前に気づかないと…。なくなつてからでは遅いのです。ちなみに、府・県別で上水道の使用量が一番少ないのは福岡県です。理由は、もともと水不足に悩まされているからです。ですから、博多などのホテルでも水を無駄遣いしないように、ほとんどが節水装置を付けています。… 次の世代、明日の世界のために、いま私たちが何をしなければいけないのかということ、ほんとうに一人ひとりが考えて、それを実行に移さなければならぬ時が来ていると痛切に感じています。そのためにも、「第3回世界水フォーラム」を実現し多いものにならなければならないと考えています。

第3回世界水フォーラム in 滋賀

「語学ボランティア」募集のご案内

来年三月十六日～二十三日の八日間、世界各国の水の関係者が集まり、世界の水問題の解決にむけて話し合う「第3回世界水フォーラム」が、滋賀、京都、大阪で開催されます。

滋賀会場では、三月十九日から二十一日の三日間、県立体育館、なぎさ公園、ピアザ淡海（大津市におの浜）を会場に、「びわ湖水フェア」（仮称）を開催します。また、フェア期間中の二十日と二十一日は、フェア会場に隣接するびわ湖ホールや大津プリンスホテルで、世界中の水の専門家やNPOなどが集まり、さまざまな水問題解決のために議論する「フォーラム分科会」が開催されます。

「びわ湖水フェア」（仮称）では、水に関するさまざまなイベントを、第3回世界水フォーラム滋賀県委員会と、NPOや一般市民の方々がいつしよになつて開催します。「水といのち・ひと」をテーマに、NPOや一般市民、企業等の方々が、「フォーラム分科会」参加者との交流を通じて、語り学ぶなかで、新しい「水」文化を創造し、全国・世界にむけて発信しようとするものです。

滋賀県委員会では、これらの「フォーラム分科会」や「びわ湖水フェア」（仮称）において、海外からの参加者と県内の参加者や一般来場者との交流のお手伝いをしたいと、「語学ボランティア」を募集しています。

『語学ボランティア』応募の要件

募集言語… 英語（英検二級程度以上）
 活動内容… 「フォーラム分科会」 受付や会場案内、県内観光に関する案内など
 「びわ湖水フェア」（仮称） 海外からの参加者とフェア参加者・一般来場者への通訳、会場運営のサポートなど
 活動場所… 大津市内の会場およびその周辺
 年齢… 十八歳以上（高校生は除く）
 募集人数… 百三十名

応募方法 詳しくはホームページをご覧ください。

問い合わせ先 左記へもお気軽にお問い合わせください。

住所 〒512-00 八五七七 大津市京町四 一

電話 〇七七 五二八 三三五四 〇七七 五二八 四八三三

E-mail dc0001@pref.shiga.jp

URL <http://www.pref.shiga.jp/wf3/>

第3回世界水フォーラム 滋賀・京都・大阪を結んで開催

開催日 2003年3月16日（日）～23日（日）[8日間]
 会場 ・滋賀：びわ湖ホール / 大津プリンスホテル
 ・京都：国立京都国際会館 / 京都宝ヶ池プリンスホテル
 ・大阪：グランキューブ大阪（大阪国際会議場）
 主催者 フォーラム 世界水会議
 第3回世界水フォーラム運営委員会
 閣僚級国際会議 日本政府
 水のえん 各実行委員会
 参加予定 フォーラム 参加者 / 8,000人～
 人数 閣僚級国際会議・参加閣僚 / 120人～
 水のえん - 来場者 / 15万人～



実体験で「ごみ意識改革」

蒲生町職員「ごみ現地研修」

増える一方のごみに歯止めをかけるため、町職員全員が週二回、半年間「ごみの回収作業を体験する」という、全国でも例を見ない取り組みを実践した蒲生郡蒲生町。今後はこの体験をもとに、町民全体にごみ意識の徹底を図り、地域循環型社会の形成を目指していく。

小さなことから「ごみ意識改革」

「ごみ意識の改革を实践」

蒲生町長 山中 壽勇氏

豊かな田園風景が広がる蒲生町は、額田王が「あかねさす 紫野行き 標野行き 野守は見ずや 君が袖振る」と詠んだことでも有名です。この歌にちなんで当町では、あいさつ、感謝、ねばり強いの「あかね運動」を四年前から実施しています。毎月一日と十五日に小学校の校門に立って登校する子どもたちにすんで挨拶し、登校する子どもたちも元気に挨拶を返しています。ただ目標を唱えるだけでなく、実際の行動によって実践する姿勢をずっと貫いています。

このやり方を行政にも生かせないかと考え、ごみ問題に行き着きました。当町



のごみに対する認識は高いほうではなく、集積所での生ごみの流出や小動物によるごみの散乱、不法投棄がある状態です。そこで昨年十月、町長に就任して最初の事業として、私は町の幹部と町議会議員、環境ボランティアと一緒にごみの研修作業を体験しました。

普段何気なく見ていたパッカー車（ごみ回収車）の回収作業ですが、現地体験してみると想像以上に過酷をきわめ、言葉では表せないくらいの重労働でありました。また、すさまじいごみの量と分別の不徹底により処理が大変になっている集積所の有様を目の当たりにして、ごみ排出のルールを地域ぐるみで徹底させなければならぬと痛感しました。有無を言わさず、じかにごみに対する意識を変えさせられたので、自分の身になって振り返らざるを得ず、わが家に帰ってすぐごみ袋の中身を確認した次第です。

全職員にもこの意識を感じてもらえたらと、昨年十二月から実施したのが蒲生町職員「ごみ現地研修」です。最初はどのようなことかと思いましたが、職員も快く受

け入れてくれました。提出されたレポートを読むと、どの職員も私が感じた感覚をもっているのです、思いは充分伝わったとの手ごたえがあります。

これからは現場で体験してきたことを町民に伝えることにより、町全体のごみに対する認識を高め、地域循環型社会形成を目指したいと思います。職員が意識改革の心をもって、役場や地域での住民に対して、たとえ小さな事柄でもひとつひとつ実践することができれば、きっと町も変わる。職員の意識が変われば、人も変わり町も変わる。そしていきいきとした町になると考えています。

市町合併が身近な問題として取り上げられる昨今、職員の資質向上と町としての独自色を打ち出すことが求められています。蒲生町では今後もこのような実践型の研修を継続し、町づくりのキャッチフレーズである「風土をみがき、みんなで次代を拓く町、蒲生町」をつくるために一万五千人の町民とともに職員一同がんばりますのでよろしくお願ひ申し上げます。

蒲生町の「ごみ対策」

今までとこれから

山中壽勇町長の号令により始まった、ごみ現地研修。実際の研修業務に携わる鈴木総務課参事と、ごみ施策を担当する

森島住民課長の談話から、研修の具体的な内容と蒲生町の「ごみ対策」の現状をまとめてみた。

蒲生町のごみの現状

蒲生町における平成十三年度のごみの処理量は、一日一人当たり五四二グラム。人口増と、昨年からごみの自家焼却が禁止されたことが影響して、前年度を上回る数字となった。また、東近江地域一市七町（八日市市、蒲生町、日野町、竜王町、安土町、能登川町、五個荘町、愛知川町）の平均と比べてもやや多いという。資源・ごみについては、空きビン・ペットボトル・アルミ缶・廃食油・牛乳パックの回収を行っている。昨年度からは、古紙（古新聞・古雑誌・古着・ダンボール）の集団回収も実施するようになった。しかし、ごみ集積所では可燃ごみに混じってこれらの資源ごみがいまだに混入されているのが実情である。

研修作業の実際

蒲生町職員ごみ現地研修は、町職員ほぼ全員にあたる、行政職と保健職員の計九十八人を対象に、平成十三年十二月から始まった。毎週月曜と火曜のごみの日に、二人ずつの班を組んでパッカー車に同行してごみの集積作業を体験する。そして、ごみの出し方と集積所に関する調査・感想のレポートを提出している。主な調査項目は、

ごみの出し方について
分別がきちんとなされているか。資源ごみが混入していないか

森島住民課長
ごみ減量実現に向けて、具体的な取り組みを次々に企画している



生ごみの水切りができていないか
ごみ袋に名前が書いてあるか
ごみ集積所について

ごみの量に対して処理能力が追いついていないか

リサイクルに向けて、資源ごみの分別回収ができていないか

衛生的な管理がなされているか

などである。

このようにして提出されたレポートの中身は、「リサイクル可能な資源ごみが、分別ができていないばかりに焼却されていく。プラスチックやトレイなどのリサイクル可能な資源がこれから増えていく時代にあつて、ごみ分別の意識を養うことが不可欠と思う」といったものや、「生ごみの水切りがされていないと、ごみの量が増えるだけでなく、衛生的にも大変悪く、集積所の衛生状態に直結することを実感した」といったものが代表的で、「ごみ意識啓発の重要さを再認識したものが多い。」

不法投棄を当番で撤去

捨てにくい環境をつくる

今年六月で、この研修作業はひとおり終了。今後はレポートの内容をとりまとめて、ごみ減量へ向けての具体的な施策を検討していく。

「ごみ問題のもうひとつの重要な課題、不法投棄についても一年前から全職員が監視と撤去作業に取り組んでいる。まず課別に職員を六班に分けて、月曜から土曜日までそれぞれ担当を割り振る。不法投棄の通報が郵便局や各地域から入り次第、その曜日の担当者が撤去に赴く。投棄の量が多い場合は班の全員が軽トラックで出動する。」

不法投棄される主なごみは、業者によって山の中に捨てられる土砂や廃材、タイヤなど。テレビなどの家電も以前から



鈴木総務課参事
職員九十八名を取りまとめ、ごみ現地研修作業を遂行している



町職員によるごみの集積作業

あつたが、昨年四月に家電リサイクル法が施行されて以降はさらに増えている。また、個人での不法投棄については、町民だけでなく町外の人が通勤途中に道に捨てているケースもあるという。

「不法投棄を見つけたら、できるだけすみやかに撤去することです」と森島住民課長は言う。不法投棄を撤去せず汚いままにしておくと、さらに投棄を重ねる人が出て、ごみの量はたちまち増える。反対に撤去してきれいになると、追加の投棄は出にくい傾向があるという。捨てる側の心理として、ごみ一つないきれいな場所にはやはり捨てにくいようだ。

職員の活動以外にもクリーンパトロー

ル隊と、シルバー人材センターに委託した不法投棄監視員が、週二回ずつ計四回、町内を監視巡回している。クリーンパトロール隊は町内の主要道路を、不法投棄監視員は不法投棄されやすい場所をチェック。こうした活動が実を結び、町内の不法投棄は巡回当初に比べてかなり減ってきている。

子どもたちへの啓発

捨てない習慣を育てる

いつころになくならない散在性ごみ、いわゆる「ポイ捨て」。蒲生町職員は「ごみゼロの日」と呼ばれる環境美化の日に併せて、町民とともに環境美化活動



蒲生町立蒲生東小学校の社会の授業にて、パッカー車を見学する小学生

に取り組んでいる。

今年度から学校週五日制が導入されたことから、教育委員会・各学校の協力のもと、社会活動の一環として小学生と中学生にも参加を呼びかけ「ごみゼロ大作戦」を実施した。町の景観をきれいにすることはもちろんだが、それよりも大切なのは、自らポイ捨てごみを捨てることによって、自ら捨てなくなる習慣を身につけてもらうことだという。

また、小学校の社会科授業でもパッカー車の見学といった体験授業を盛り込んでいる。ごみに対する認識を高めるようにしている。

自主的な環境ボランティア活動を推進

平成十三年度から、蒲生町環境推進協議会が発足した。それまで蒲生町では区長会や婦人会等各種団体長による、環境を守る生活推進協議会とごみ減量リサイクル推進協議会という二つの団体があったが、構成するメンバーが他にも活動を抱えているため、どうしても限界があった。そこで環境を専門に自主的な活動をしてもらうための環境ボランティアを募集。応募のあった二十九名のボランティアによって組織し、結成された。

組織で活動内容を決めて、そこに町が援助をする方式をとっている。今のところ、家庭での生ごみ処理機使用推進、広報誌「エコライフ」の毎月発行、買い物

袋持参運動として「マイバッグ」の斡旋販売や街頭販売などを行っている。また、店の側に対しては、買い物袋を使ってもらっているなどの環境に配慮しているかどうかのチェック項目を設け、クリアした店を「モニターの店」として認定している。現在までに、平和堂など町内の大店舗七店が認定を受けた。

家庭だけでなく、店から出るごみも全体の排出量の多くを占める。過剰包装の問題も含め、店にもごみを少なくしてもらう意識を植え付けられないかと、いま目をつけているところだという。今後はもっと組織の人数を増やし、さらなる活動を広げていきたいところだ。

集落内でごみ袋の名前記入100%を達成!

昨年、生ごみ処理機のメーカーから蒲生町に対してモニター要望があった。そこで町の集落に公募したところ、一集落が名乗りをあげたので、昨年七月から今年一月までの六カ月間、自主的に生ごみ処理機を使ってもらった。するとその集落では分別もしっかりと行われ、生ごみは一切出さず、ごみ袋の名前も100%記入されていた。ごみ処理装置に関する情報をきちんと通知して、意識の徹底を図っていくなら、自分が捨てるごみがどのよう処理されるのかを住民が認識して、成果が上げられることが証明されたといえるだろう。

町としては今年度、生ごみ処理機の正式購入を考えているが、非常に高額なため予算的にも厳しい。そこで、生ごみ処理機の購入に関して県からの補助制度ができればと望んでいる。

おわりに

蒲生町のごみ処理施策はまだそのスタート地点にいたばかりで、数字として目に見える成果があるまでには長い目で見る必要がある。研修活動で得た貴重な体験を、現行のごみ処理施策に活用していくのが今後の課題である。ただ、職員が町民と信頼関係を構築し、協力しながらごみ減量の目標を達成するためには、職員一人ひとりがごみ意識改革の意欲をもって取り組むことが不可欠である。蒲生町ではその動機づけにまず成功したといえる。

町長の談話にもあったように、ある大きな目的を達成するためには、小さなことからひとつひとつ、人々に働きかけて奔走することが大切。思いを人に伝えて、受け取った人がまたその思いを別の人に伝える……この繰り返しの連鎖によって、最終的に大きな運動のうねりとなるのだ。蒲生町のごみ意識改革の心は町長から、研修作業によって職員へと伝わった。これからは職員から町民全体へと、具体的施策の実践によってさらなる輪を広げていく番。今後の展開を見守りたい。

(取材日：平成十四年六月十八日、蒲生町役場にて)

私の意見論評

明日の『環境滋賀』を考える

地球温暖化防止活動推進員
上原 一次

琵琶湖に住む魚たち

琵琶湖に古くから住んでいた淡水固有種の魚は六十種程度と言われていますが、現在ではその中の多くは琵琶湖博物館以外では見ることができません。今や、琵琶湖の水面上は外来魚のブルーギルとブラックバスに占拠されていると言っても過言ではないでしょう。特に南湖は甚だしい実態です。もしこのまま放置すると、琵琶湖で生育する魚類の生態系はどうなるのでしょうか？

最近県農村整備課に『魚のゆりかご水田プロジェクト』が設置され、その実験結果として一六アールの水田で約八万匹のニゴロブナが育っていることが確認されています。幸いなことに、滋賀県では『環境こだわり農産物認証制度』が二〇〇一年度より施行され、農薬や化学肥料の使用を削減して環境負荷を少なくする技術ができていたり、水田の圃場整備もほぼ完了しているため、一筆排水口の構造にすることでニゴロブナの遡上を可能にし、一時的水域での魚類の繁殖育成は充分期待できることが証明されています。近江米の生産と並行してニゴロブナが復活し、近江食文化の代表でもある『ふなずし』が、一般庶民の食卓の定番になる日が来ることを願っています。

おそろしく近い将来に、歴史と伝統のある固有の淡水魚資源は枯渇する時を迎えることになるでしょう。私はその対策として『水田の多面的機能の一つとして、水田養魚によるニゴロブナ等の水産資源の回復実験の実施』を県当局に提案いたしました。ニゴロブナ等の固有魚激減の原因として、内湖の干拓と外来魚の異常繁殖がありますが、これを元に戻すことは至難の技です。もし実行するとしても莫大なる予算と長い年月を要することでもあり、すでに手遅れの状態になっているのです。そこで琵琶湖の次に面積の大きい湿地である水田に

京都議定書の早期発効

二〇〇〇年四月七日、八日大津市において、G8環境大臣会合の機会に並行して、地球温暖化防止シン

ポジウム「DON'T KILL京都議定書」が開催され、これに参加いたしました。その成果として「おみ宣言」を採択し、同年七月に開催予定のG8沖縄サミットにおいて議題の一つとして議論する要請が満場一致でなされました。しかしながら、莫大な費用を投入した沖縄サミットでしたが、京都議定書に関して一言も触れることなく社交辞令的なサミットで終了しているのです。G8環境大臣会合開催県として残念でなりません。日本政府の外交の弱さ、幼稚さを他の先進国に示したことになりました。G8環境大臣会合や世界湖沼会議が大津市で開かれた意義を、NPOや有識者だけでなく広く県民に徹底して啓発すべきことがやや不足していたのではないのでしょうか。京都議定書についての論評は、当時は新聞やTVのマスコミで取り上げられていましたが、昨年九月十一日のニューヨーク同時多発テロ事件後はなぜか論議から消えつつあるのが気になっています。

地球温暖化防止のための京都議定書の早期発効はまさに政治問題でもありますが、環境先進県である滋賀が率先してこれを国民運動として、国民の支持により日本政府が揺るがない方針で対処するように行動を起さすべき時期ではないでしょうか。今二十一世紀の入り口に立っていますが、環境の悪化は依然として進行する一方で、天然資源も枯渇しつつあり、未来を担う世代の人たちの生活基盤が脅かされている状況にあります。我々がこの地球に住む限り、地球環境を守っていく義務があります。個人として「環境こだわり県民」である自負を常に意識して、その意識改革啓発の輪を県民各階各層に周知徹底し、継続して実践していくことが、まずは第一歩でありましょう。さて、そこで私たち一人一人ができることは何なのか。私は淡海生涯力レゾの実習で「わが家の電気使用量の削減」に取り組んだことがあります。十名のグループの中で、対前年同月より減量できた人は三名だけでした。私は電気ポットの使用を中止して、普通の魔法瓶に切り替えた結果、対前年一六%の電気使用量を削減することができました。市民の一人一人がライフスタイルを、また少しエコロジカルにすることを実践すればトータルとしての成果は大きく、グローバルな問題でも地域や地区といったレベルで実践することで、その糸口が見えてくるのです。今後は地域リーダーとして、率先して行動を起こして行きましょう。今

は、出る杭は支援される時代なので
す。

まちづくりと環境問題

滋賀県の地形は琵琶湖を真ん中に
周囲が山に囲まれていて、言わば一
つの小宇宙のようだとはいわれていま
す。県境はすべて山の中にあります。
この山、森林を源流として多くの河
川が琵琶湖に注いでいて、まさに
「森は湖の恋人」と言えましよう。
河川の経路沿線に広がる水田や農村
集落には、原風景としての自然があ
ります。二十一世紀はこの自然環境
に目を向けていく時代です。

滋賀県では、環境こだわり県を目
指していくなかで「びわ湖地球市民
の森づくり」が野洲川廃川敷でスタ
ートしています。県レベルの森づく
り運動として、また子供たちの環境
体験学習の場としてのプロジェクト
が進められています。時代を担う子
供たちが学校教育の場を離れて体験
しながら環境を学ぶことは重要で
す。その一環で、京都と滋賀が相互
に助け合い、その情報の交換や体験
型環境教育を提供する場として、京
滋の大学の先生や行政がパートナー
となつて、京滋体験型環境教育研究
会が設置されているところです。
二十一世紀はコミュニケーション

から始まる「環境の世紀」とも言わ
れ、滋賀県においては『世界湖沼会
議』に続いて、『第3回世界水フォー
ラム』が二〇〇三年三月に京都市を
中心とする滋賀、大阪の琵琶湖・淀
川水系地域で開催されることになつ
ています。また環境新産業振興とし
て、毎年『びわ湖国際環境ビジネス
メッセ』も長浜ドームで開催される
など、環境こだわり県として環境学
習が専門的に受けられる機会が滋賀
にはたくさん仕組まれているのです。

二十一世紀の幕開きである二〇〇
一年に「湖国21世紀記念事業として
夢々舞めんと滋賀」が県内各地で展
開されました。実に二二五のグルー
プが、まちづくりのヒントとなるユ
ニークでオリジナルな活動を催しま
した。しかしながら、単に思いつき
だけの一過性のもも多くあつただ
けに、地域住民が参加・参画して継
続され、特色のある持続可能なまち
づくりにすることが大切だと思いま
した。

県土の五〇%が森林・山である滋
賀には、長い間人の生活にかかわつ
てきた里山があります。古くは、農
村コミュニティの共同の財産区とし
て里山の保全や水田水利権を集落の
宝として守る実態があつたことを考
えると、個人としてはできなかった

こともコミュニティでは実現可能で
あり、持続可能なまちづくりの原点
もそこにあるのです。

森林の中に堆積される落ち葉と生
ごみを混合発酵させてたい肥にする
とか、森林木の廃材からエネルギー
となり得る物質を創造するなど、森
林の未利用資源を有効に使うエコシ
ステムにすることで、現代的なエコ
ライフを小規模分散型で推進啓発し
ていくこともよいと思います。滋賀
ではその活動を推進・実現していく
ための施策力等は充分持っているは
ずです。環境に配慮したまちづく
りの情報源を発見することもできる
のです。今すぐに役に立たないこと
であつても、将来の環境滋賀への期
待を残すことが現代を生きる人の使
命でもあります。

県行政では、今後の二十年で昭和
四十年代初めのような水質を持つ美
しい琵琶湖に戻すべく、また次代へ
引き継ぐことができるようにいろいろ

るな施策が講じられています。しか
し、全国一の人口増加県でもあり、
現状維持するだけでも難しい状況に
あります。加えて、案外忘れられて
いるのが雨水の問題です。目には見
えない地上の汚染物質が、雨水に混
ざり一斉全面的に琵琶湖に流入して
いることも現実に緑り返し起こって
いるのです。この雨水を貯留して、
生活のライフラインとして利用する
ことも地域や共同体単位であれば、
充分に実現可能です。これからのま
ちづくりは小規模分散型レベルで、
実践するための創意工夫が必要でし
ょう。

以上のことはほんの一例にすぎま
せんが、これらのことを総合的に考
えますと、「エコ村ネットワーク」
がめざす環境、福祉教育、生きがい
等々の問題を自律的に解決すること
のできる村、環境滋賀の理想郷とも
いっべき「エコ村」が滋賀の地に誕
生することを期待するものです。

「ニューエコビジネスの取り組み 生態学的経済発展を望む」

淵本電設株式会社 代表取締役
淵本 義彬

地球の大自然を自分なりに勉強さ
せていただくとき、幾度となく出て
くるのが「生態」という言葉です。

さつそく辞書で語源を調べてみる
と、「生態とは」という説明のほか
に、「生態学」「生態系」「エコロジ

ー」などの関連語句も載っています。我々が住んでいる地球は、この生態系の絶妙なバランスによって保たれているわけです。ほんの些細なことでも知らない間に、生態系にとって非常に大きな影響を及ぼすことになり、バランスを崩すことになるのです。たとえば、琵琶湖には過去にいなかった、あのブラックバスやブルーギルという魚が、琵琶湖の生態系に影響を及ぼしていることが挙げられます。そしてこのようなことは、社会経済においても言えるのではないかと思います。

さて、現在はデフレなどと言われていますが、企業はその技術力・企画力・宣伝力で社会の複雑多岐のニーズに応え、さらに新たなニーズをも創り出してきました。そして、その利益は税金として国へ納められ、雇用対策としてその税金の一部が還元されているのです。我々が今日このような便利な生活を送っているのも、まさにその恩恵に他なりません。その上、この当たり前の生活は企業が創り出してきたことは言うまでもないことなのです。

私自身、過去に遡って考え思い起こして現在社会を見てみると、いろ

いろなことに気づかされます。毎日飲んでいる牛乳や食べている卵、乗っている車や住んでいる家などを以前と比べてみると、味や質、性能や建材にいたるまで格段に良くなっています。これは大きな変化です。私が小学生の頃は、牛乳と卵といえば近くの乳牛を飼っている農家へ、また鶏舎へと、飲み物の瓶が粉穀の入った買物力ゴを持たされて行った記憶があります。車といえば田舎ではせいぜい軽トラックの中古が普通でした。また夏の夜を過ごすには、蚊を防ぐ蚊帳と一家に一台か二台の扇風機があれば充分でした。父の飲んでいたビールといえば瓶ビールで、近くの酒屋がビールを持ってきてその帰りに空になったビール瓶を返すといった具合でした。今のドイツのリターナブルシステムのようなものです。

今話したことはずいぶん昔のことと思われるかもしれませんが、わずかか三十数年前のことなのです。その当時は、ゴミは少ないうえ川はきれいだったと記憶しています。近年よく言われている再利用やリサイクルといったことが、自然に実践されていた結果でしょう。しかしながら、

人々は生活の便利さを求め、消費使い捨て社会を謳歌してきたのです。その結果が、たとえば身近なところでゴミ問題という弊害として現れてきています。一部の心ない人たちが道端、空き地、河川の堤防、公園、湖岸等至る所でポイ捨て(不法投棄)するのでゴミの山です。そしてそのゴミの後始末をボランティアの人たちが行ったり、行政が貴重な税金を使って回収し、処理をしているのが現状なのです。このスパイラル現象を、どこかで止めるために効果的な対策を打ち出さない限り、いくらお金を投入しても足りません。

今こそ本当にこの状況を深刻に受け止め、考え直す時期がきているように思います。しかし、顧客ニーズが「環境のために」と意識を変えない限り、また行政がそれらをバックアップ及びサポートしない限り環境にはマイナスとなり、その解決には莫大な資金が必要となるのです。以上話してきたことから、一個人としてまた事業を営む者として、今後の経済発展を考えるとき、必ず頭に入れておかなければいけないことが「生態学的な経済発展」であると強く思うのです。

ところで、私は今「ニューエコビジネス」の『住宅用太陽ひかり発電システム』の普及に全力を尽くしています。これは、すでにみなさんが日常的にお使いの電卓などに利用されている「太陽電池」のことで、自宅の屋根に太陽電池を設置し、太陽の光を電気に変え自給自足できるシステムです。今では、太陽電池パネル自体が屋根材にもなって利用されているので、ご存じの方もおられるでしょう。

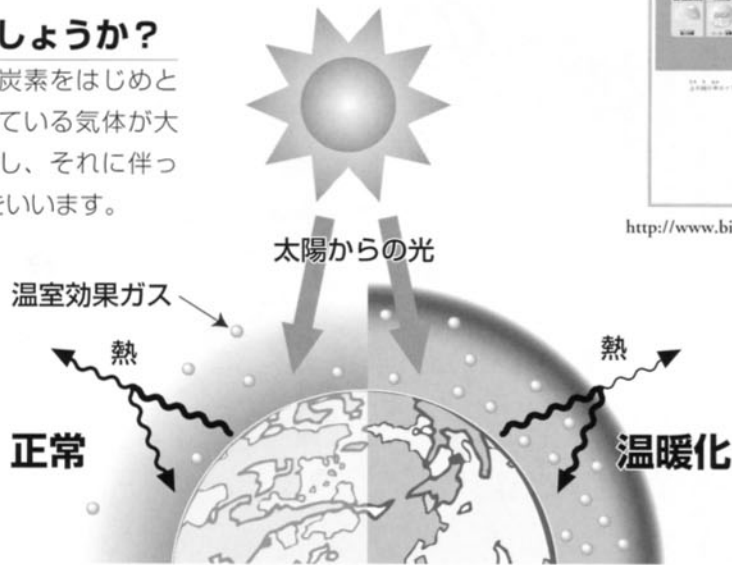
そこで、私流の「生態学的な経済発展」から考えあわせてみますと、太陽電池を商品化するにも多くのエネルギーを要しますが、これを日本国内の一般家庭に設置した場合、約三年間でつくられる電気エネルギーで相殺できるものなのです。あとは太陽の光エネルギーのみで電気が発生されるわけで、ほとんど無限に近い供給ができ、人類史上最もクリーンなエネルギーだといえます。もちろん、環境に良いのは言うまでもありません。そのような理由で、この仕事はおそらく私のライフワークにもなるでしょう。

【URL <http://www.pat-hi-ho.ne.jp/sunsun>】

地球温暖化基礎知識

地球温暖化とは何でしょうか？

地球温暖化とは、二酸化炭素をはじめとする温室効果ガスと呼ばれている気体が大気中に増加して気温が上昇し、それに伴って気候に異常が生じる現象をいいます。



<http://www.biwa.nc.jp/ohmi9/ondanka/kids/index.html>

地球温暖化で生じる現象は何でしょうか？

字だけを見ると地球が「ぬくく」、「あたたかく」なりそうで、暮らしやすくなりそうな印象を受けます。しかし、実はそんな生やさしいものではなく、気温が上昇すると、雨雲のでき方や風のふき方が変わってしまうため集中豪雨が起る地域があるのに、近くでは大干ばつに苦しむ地域ができたり、気温上昇についていけない動植物が全滅したり、ほかにも海水面が上昇して海拔の低いところが水没するという可能性を持っている恐ろしい環境問題なのです。



なぜ温室効果ガスが増加したのでしょうか？

電気などのエネルギーを作るのに、石油などを燃やして作っているために二酸化炭素が出てきます。しかも、森林を切り倒して植物を減らし木材にしたり、宅地を造成したり、放牧地にしたりして、二酸化炭素が吸収される量が減っている上に、電気、ガスなどのエネルギー消費量が増えているためです。



どうすればよいのでしょうか？

では、どうしたら地球温暖化を防ぐことができるのでしょうか。まず、温室効果ガスを減らすために省エネルギー、つまりエコライフに努めることです。屋根の上や南側の庭先に植物を植えると、夏に涼しくなるために冷房をかける時間を短くできますし、家を建て替える際に二重窓にし、壁に断熱材を入れると暖房の時間を少なくできます。また、近所に出かけるときは自動車ではなく、自転車や徒歩にするのも良いでしょう。少し遠くてもバスや電車を使うと省エネになります。



滋賀県は近畿府県と共同で夏のエコスタイル運動をしています。エコスタイル運動とは、ネクタイと上着をなくして冷房を極力使わないようにすることです。ぼくは毎朝大阪から電車で来ていますが、大津駅で降りる際、周りを見ていると多くの人がネクタイを締め、上着を着ています。大津駅で降りる人の中でも県庁方面に行かない人は、やっぱり上着ネクタイ着用で出勤している人が多くいます。つまり、県内の一般企業に勤めている人には、まだまだ浸透していないということでしょう。なぜなら、商売の習慣としてスーツとネクタイが制服となっている現状では、ネクタイと上着なしで仕事をする取引先に無礼と受け取られてしまい、商売がうまくいかなくなるからかもしれないのです。経済団体を通じた県庁からの協力依頼より商売のほうが大事ですから、当然といえば当然でしょう。

では、どうしたらエコスタイルを一般企業に実践してもらえるようになるのでしょうか。たとえば、省エネ条例のようなものをつくってはどうか。これなら、条例で決まっているからという理由で暑い最中に暑い格好をしなくてすむため、一般企業の人にも実践

してもらいやすいのではないのでしょうか。しかし条例をつくったとしても、現状としてアイドリングストップを呼びかける条例のように存在はしているものの、あまり浸透していないものもあります。つまり、県民すべてで行えるようにするには、まず、条例の知名度を上げる必要があります。その上でしっかり浸透させ、啓発していくことが欠かせないでしょう。

実は滋賀県には「地球温暖化防止活動推進センター」というものがあり、温暖化防止に向けて、啓発活動等を行っています。アイドリングストップやエコスタイルを実践してもらうことは、地球温暖化防止対策の一環でもあることから、啓発をして、実行してもらえるようにしなければならないのに、地球温暖化防止活動推進センターは一体何をしているのでしょうか。これは誰の仕事かと考えてみれば、ぼくの仕事でした…。もっと温暖化防止対策を実行してもらえるよう啓発活動に努めますので、皆様のご協力をお願いします。

財団のひとりとごと
h i t o r i g o t o

エコスタイルを浸透させよう



「ヨシ腐葉土」好評発売中！

当財団では、刈り取ったヨシを有効に活用するため、ヨシの腐葉土を職員の手作りで製造し、販売しています。

ヨシ腐葉土は、琵琶湖のヨシを原料として作ったもので、**通気性、透水性**が特に優れているため根張りが良くなり、根腐れの心配がありませんので、家庭菜園づくりにも好評です。

お問い合わせ、ご注文は当財団へお願いします。また、**滋賀県種苗生産販売協同組合加盟の種苗店**や**㈱アヤハディオの各店**でも販売していますので、一度お試し下さい。



『朝霧の中の曾根沼の一景』疋田光男

第3回淡海フォトコンテスト(シニア部門)環境大臣賞受賞作品

淡海フォトコンテストとは

滋賀県には、琵琶湖や森林をはじめとする多くの豊かな自然があります。これらの自然を保護しようとする意識を多くの人々に育んでいただくため、滋賀県の美しい自然をテーマとしたフォトコンテストを平成11年度より実施しています。

今年(平成14年)度は、シニア部門とビギナー部門の2つの部門を合わせて、全国から212点の応募があり、環境大臣賞を含め33点の入賞作品が選ばれました。

編集後記

来年、「第3回世界水フォーラム」が滋賀、京都、大阪の3地域でリンクして開催されます。本号でも、この国際会議に関係した取材を行いました。そこであらためて実感したのが「水も限りある資源」であるということです。考えてみれば当然のことなのですが、蛇口をひねれば水が出る日々の暮らしの中では、忘れがちなことでした。また、発展途上国の人々の疾病の約80%が汚水に起因するものであり、世界的に見れば、これらが原因で8秒に1人の子どもたちが死亡していることも知りました。

現在の世界の人口は約60億人ですが、2025年には約80億人にまで増加すると予測されています。水の不足が世界紛争の火種になるというも納得できる指摘です。環境問題の中でも、水はきわめて重要なテーマであることを一人ひとりが深く理解し、それぞれの対応を心がけなければならない時代が来ています。

原稿の募集について

機関誌『明日の淡海』では、環境や自然に関心のある方々の意見・提言などを募集しています。

- ・環境問題に対する考えや環境施策への意見・提言等
- ・環境に優しい暮らしにつながる意見・提言等
- ・美しい自然や自然保護に対する意見・提言等

採用分には薄謝進呈

当財団まで郵送・メール又はFAXでお送り下さい。

発行 財団法人 **淡海環境保全財団**

〒520-0807 大津市松本一丁目2番1号

☎ 077-524-7168 ☎ 077-524-7178

E-mail ohmi9@mx.biwa.ne.jp

URL <http://www.biwa.ne.jp/ohmi9/>

編集・制作 アド・プロヴィジョン株式会社